

平成22年 6月 3日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520085

研究課題名（和文） 技術哲学の新歴史主義的研究

——カッシーラー・三木・ハイデッガーの1930年代——

研究課題名（英文） New Historical Research on the Philosophy of Technology

— Cassirer, Miki, and Heidegger in the 1930s —

研究代表者

(INADA TOMOMI)

独立行政法人国立高等専門学校機構・津山工業高等専門学校・一般科目・教授

研究者番号：70221778

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は技術哲学の意義を、おもにドイツの伝統におけるその歴史を概観することによって、新歴史主義的に解明することだった。そこでわれわれはまず、1930年代に技術についてそれぞれ独自の見解を表明したカッシーラー、三木、ハイデッガーといった、主要な技術哲学者について比較研究をおこなった。つぎにわれわれはそれらの思想家の歴史的背景を調査した。そしてわれわれは最後に、われわれ現代社会にとって、技術哲学の新たな可能性を見いだすべく努めた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the significance of a philosophy of technology in new historical perspectives, by illustrating the outline of its history chiefly in the German tradition. Thus we comparatively studied, first, major philosophers of technology, such as E. Cassirer, K. Miki, and M. Heidegger, who had given their own views on it in the 1930s. Next, we investigated the historical background of these thinkers. Finally, we attempted to find new possibilities of the philosophy of technology for our present-day society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、思想史

キーワード：比較思想史、技術哲学

1. 研究開始当初の背景

(1)われわれを取り囲むすべてのものが、技術によって媒介されている。自動車やコンピュータをはじめとして、われわれの誕生から死にいたるまで、技術に関係していいもの

はないとっていい。だから、哲学が今なお健在であるとしたら、〈技術哲学〉ないし〈技術の哲学〉が存在しなければならない。ハンス・ヨナスも述べているように、「技術は大地のうえで人間が存在するすべてにかかわ

る中心的かつ急迫的な問題なのだから、それゆえまた技術は哲学の事柄になったのであり、そうするとテクノロジーの哲学といったものが存在しなければならない」。しかし、「なければならない」という要請は、そうした技術哲学の現代的意義が広く認知されているにもかかわらず、それがいまだ存在しないこと、その存在がきわめて困難であることを示している。

(2)たしかに、今日、技術にかんするさまざまな学問がある。たとえば、技術社会学であるとか、工学倫理であるとか、科学技術社会論(STS)であるとか、社会科学的なテクノロジー・スタディーズは隆盛をほこっている。その影響を受けて、アンドリュー・フィーンバークやラングドン・ウィナーなどに代表される現代アメリカの技術哲学は「経験論的転回」を遂げている、とされる。だが、諸技術の社会的事例の実証的分析が哲学的省察をそれだけで豊かにするとは、かならずしもいえないだろう。

(3)技術の起源は科学よりも古く、人類の誕生とおなじくらい古い。周知のように、テクネー〔＝技術知〕についての哲学的考察は、古代ギリシャからあった。しかし、「技術の哲学が書名として登場するのは、産業革命後、発達した技術による社会問題が顕在化した19世紀後半においてのことだった。エルンスト・カッパの『技術哲学綱要』が、その最初の例とされる。そして20世紀初頭になると、多くの著名な哲学者が〈技術〉について主題的に論じはじめる。そのころ書かれたカール・ヤスパースの『時代の精神的状況』によれば、「技術の時代における意識と機構の支配とは、人間を豊かにすることによって人間を息苦しくするように思われる」。ヤヌスのように2つの顔をもつ技術は、まさに時代の課題となった。

(4)以上から、本研究が主として1930年代の「技術哲学」関連テキストに着目する背景が明らかだろう。技術は当時の哲学者にとってひときわ挑発的な問題だった。哲学という伝統的な学問にとって、技術は哲学が自分自身の有効性をためす試金石だった。技術という新たな歴史的動向に当時の哲学者がいかに応答したか、そこに、現代にまでつながる〈技術哲学の可能性〉を見いだすことができるのではないだろうか。本研究は、技術と哲学とが切り結んだ歴史的瞬間を思想的に想起することによって、技術哲学の新たな可能性について考察しようとした。

2. 研究の目的

(1)本研究は、以下の3名の哲学者を主題的に

取り上げた。すなわち、20世紀の哲学者のなかで卓抜な技術論を唱えたことで知られるマルティン・ハイデッガーと、かれと面識のあったエルンスト・カッシーラーと三木清とである。

カッシーラーとハイデッガーとは、1929年ダヴォスで公開討論をおこなった論敵であり、また、三木は留学中にマールブルクでハイデッガーから直接の教えを受けた。この3人に本研究がとくに注目したのは、かれらがおおよそ1930年代から、独自の仕方、技術を自分の哲学の課題としている事実である。カッシーラーは1930年に「形式と技術」と題された論文を執筆した。三木は、1936年に小論「技術学の理念」を、1938年に『構想力の論理』第3章「技術」を、1941年に著書『技術哲学』を発表した。さらにハイデッガーはというと、最近出版された『エルンスト・ユンガーについて』(全集90巻)によって、1930年代におけるハイデッガー技術思想の展開をうかがうことができるようになり、「プレーメン講演」や「技術への問い」へと結実する後期ハイデッガー技術論をその生成過程から解明できるようになった。

(2)しかし、なぜ同時期に上記3名はそれぞれの仕方、技術を問題にしたのだろうか。おそらくこの問いへの答えはかれらの哲学テキストの内部のみに書き記されているわけではないだろう。そこには、〈時代〉の顕著な影響があった。当時、技術者エーベルト・チンマーやフリードリッヒ・デッサウアー、哲学者マンフレッド・シュレーターなどがついて同名の著書『技術の哲学』を出版したし、歴史学者オスヴァルト・シュペングラーや社会学者ヴェルナー・ゾンバルトや作家ユンガーも技術について論じた。つまり、上記3名の哲学者は、このような同時代のさまざまな技術論に敏感に反応しつつ、それをさらに哲学的に厳密に基礎づけようとしたと考えられる。

本研究が〈新歴史主義〉的な研究と自称したのは、こうした理由からである。新歴史主義とは批評理論の一つであるが、この立場からするならば、哲学的テキストの特権性は否定される。どんなに天才的な哲学者の作品といえども、〈歴史〉という巨大な物語テキストから読解されるのでなければならない。したがって、本研究の主題領域は、3名の哲学者の著作だけにかぎられるわけではなく、それらを包括するもろもろの周縁のテキストまでも視野に入れるのでなければならない。今では忘却されてしまった歴史のスクラップを丹念に渉猟し、それらを参照軸としつつ、カッシーラー・三木・ハイデッガーの〈技術哲学〉の特質を浮かび上がらせること、このことを本研究はめざした。

(3)総括すると、本研究の目的は、1930年代にそれぞれ独自の仕方卓抜な技術論を唱えたことで知られるカッシーラーや三木清やハイデッガーを主題的に取り上げることによって、技術哲学の新たな可能性を新歴史主義的に究明することである。つまり本研究は、哲学者の思想を内在的に追跡する哲学研究ではなく、技術哲学にかんする思想史研究である。今では忘却されてしまった歴史のスクラップを丹念に渉猟し、それらを参照軸としつつ、カッシーラー・三木・ハイデッガーの技術哲学の特質をその時代背景から浮かび上がらせること、これが、新歴史主義的と称した本研究がめざしたところである。

3. 研究の方法

(1)本研究は新歴史主義的な研究手法を標榜していた。いかえれば、本研究は哲学的テキストのたんなる内在的研究ではなく、1930年代の技術哲学にかんする具体的な諸資料に依拠した思想史研究を企図していた。

(2)したがって、本研究を構成するもっとも重要な要件は、〈研究資料の収集〉だった。技術哲学に関係したカッシーラー・三木・ハイデッガーの原典資料を集めるだけでは、本研究にとっては不十分である。新歴史主義的な研究手法にしたがうなら、周縁的なテキストをどれだけそろえることができるかが、研究の成否の鍵である。周縁的なテキストは、当時の時代情勢をうっしだすものであれば、主題的にあつかう哲学者と直接的な関連がないものでもよい。むしろ、かれらとまったく関係のないもののほうが、新歴史主義的研究としてはおもしろい。技術哲学にかんする稀観本をはじめとして、当時のエンジニアが読んでいた雑誌の関連記事、このような副次的資料までも渉猟しつつ、本研究は「カッシーラー・三木・ハイデッガーの1930年代」をできるだけ鮮明に再現することに努めた。

(3)資料が書籍であれば、かなりの稀観本でも日本国内の図書館で入手可能である。そのための情報を入手するにあたってインターネットを活用することは、今日では常識である。しかし、時代を反映する鏡として雑誌にまで資料発掘の手を広げるなら、やはり国内だけでは十分な情報は得られない。結局、資料収集のためにドイツに出張し現地調査することが、本研究では欠かすことができない。そこで、古い文献が豊富にあるという理由から、ベルリン州立図書館とライプツィヒ国立図書館を中心として、哲学者ゆかりの大学図書館なども渉猟することにした。研究期間中の各年、2回の国内調査旅行と、1回の国外調査旅行を確実に実行した。

(4)なお、本研究には、研究分担者および研究協力者はいない。膨大な資料の発掘・整理・翻訳といった作業を、すべて研究代表者本人が1人でおこなう。研究が当初の計画どおり進まなかった場合も考慮し、十分な研究時間を確保することが必要となる。そのため本研究では、研究を遂行するための期間として3年間を設定した。

4. 研究成果

(1)既述のように、〈技術哲学〉をあらたに形成することの学問的意義については衆目的一致するところであろう。現代がテクノロジーの時代であるかぎり、現代の哲学は自らの技術哲学をつくりだすことができなければならない。そのために、たとえば現代アメリカの技術哲学の紹介をこころみる研究者もいるだろうし、ハイデッガーの技術論を内在的にかれの哲学的発展のうちのみ主題化する研究者もいることだろう。こうした研究の意義を否定するわけではないが、これに類する研究はすでにさまざまな文献のなかでなされてきた。

ところが、本研究の学術的特色は、1930年代技術論の諸相を新歴史主義的に究明するところにある。このようなこころみは、管見では、世界的にも非常にめずらしいものといえるだろう。そもそも哲学の専門家のなかで、20世紀初頭に『技術の哲学』を著したデッサウアーについて記憶しているひとが、はたしてどれだけいるだろうか。われわれが忘却してしまった歴史的事実は多い。だが、今日まで名を残す偉大な哲学者でさえ、そうした歴史的現実のただなかで思索したのは、たしかである。「技術にかんする《諸哲学》は、あたかも《技術》と《人間》とがそれ自体で物在する二つの《量》や物であるかのようにふるまっている」と、ハイデッガーも批評的言辞を残している。本研究は、すでに忘れ去られた過去の技術哲学関連テキストを発掘することによって、現代・将来にまでつながる〈技術哲学の可能性〉を発見しようとした。

(2)上記の趣旨にしたがって、まず本研究は、研究主題となる3人の哲学者が技術哲学についてどのようなことを述べていたのか、比較思想的に解明しようとした。おもに全集版に依拠しつつ、3者それぞれの技術把握の共通点と相違点を照らしだすことによって、現代のわれわれにとって意義深い技術哲学の可能性を発見しようとした。

(3)つぎに、本研究計画を構成する重要な要素は、3人の哲学者をつつみこむもろもろの周縁的なテキスト、ひいては、技術によって特徴づけられた歴史という巨大な物語テクス

トを読解することだった。そのためのさまざまな研究資料を収集することが、本研究にとって決定的に重要である。このことから、ドイツへ海外出張し国立図書館や州立図書館や大学図書館を涉猟し、19世紀末から20世紀前半に流行した「技術の哲学」に関する諸著作、当時のエンジニアが購読していた諸雑誌からの興味深い記事などを収集した。

(4) 以上の研究資料を利用しつつ、カッシーラー・三木・ハイデッガーの技術哲学の特質を浮かび上がらせる仕事は、おおむね完了したと考えている。技術哲学関連の3人の諸著作、関連する研究文献を引用参照し、すでに論文「技術哲学の可能性——カッシーラー・三木・ハイデッガー——」を執筆した。また、上記論文の内容には異文化理解の問題がひそんでいるので、共著『インター・カルチャー——異文化の哲学——』の第1章として、「グローバル／ローカルな場としての技術哲学——カッシーラー・三木・ハイデッガー——」を公刊した。

そこでは、つぎのことが明らかになった。「これまでの行論から、わたしがどこに〈技術哲学の可能性〉をみとめようとしているか、すでに明らかだろう。カッシーラーは偉大な哲学者だったが、伝統的な哲学的知があまりに優勢であったため、精神さえもあらかじめ規定してしまう技術のひめられた力に気づかなかった。逆に、現代文化を制圧する技術の威力をみとめた三木は、それを制御するために、哲学を政治に解消してしまった。これにたいして、ハイデッガーは晩年においても、「わたしたちは技術への本質的な関与をまだもっていない」と、きわめて謙虚に告白している。これはけっして技術にかんするペシミズムではない。技術を操作しようとして、じつは技術によって操作されてしまう、技術の本質にひそむ圧倒的力を、問うにあたいするものとして尊重する思想家の言葉である。ハイデッガーはタイプライターという道具においてさえ、「手の、文字への、すなわち語への、すなわち存在の非隠蔽性への、タイプライターによって変貌した近代的な関与」を読み取ることができた」。

(5) 本研究の最終目的は、技術哲学のあらたな可能性を提示することだった。そこで、本研究は、これまで調査して得られた歴史的知見を現代に活かしつつ、「技術文化」「臓器移植」「適正技術」といった歴史的事例や現代的事例を検討することによって、技術論の哲学的省察を試みた。このことを詳細に論じたのが、論文「技術の政治性／倫理性／複数性——事例研究による技術哲学の基礎づけ——」である。論文の結論を掲げるなら、「これらの事例研究から明らかになったことは、技術決定

論であるとか、技術を価値中立的なものとなす技術道具説であるとか、そういった従来の伝統的技術観がすでに失効しているということである。われわれが模索する新たな技術哲学は、技術それじたいのうちに政治性／倫理性／複数性をみとめるところから出発しなければならない」。

(6) 毎年の海外出張によって、日本では入手困難な稀覯本や古雑誌の膨大な資料を複写して持ち帰ってきた。それらの一部は、論文や著書の執筆に利用した。だが、現状では、まだ完全に目を通すこともできていない資料が多々ある。しかし、これらは無駄になるわけではない。「ハイデッガーとその時代」について思想史的に研究することが本研究者のライフワークであるが、本研究で得られた貴重な研究資料は、今後の研究で活用される予定である。

その確約となるのが、2010～2013年度の基盤研究(C)として新規に科学研究費補助金に採択された研究「「住む」ことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」である。これまで技術哲学について資料を集め、見識を深める努力をしてきたが、それはモダニズム建築を考えるさいの有力な武器となることだろう。ハイデッガー哲学をたんに内在的に分析するだけではなく、三木清やカッシーラーといった他の哲学者と比較すること、さらに広く、当時まさに流行していた技術哲学やモダニズム建築といった時代精神のなかからハイデッガーの哲学をとらえなおすこと、このような「ハイデッガーとその時代」をめぐる思想史研究をこれからも続行していき、相応の研究成果を公表していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 稲田知己、「技術哲学の可能性——カッシーラー・三木・ハイデッガー——」、津山工業高等専門学校紀要、第49号、pp. 79-87、2007、査読有
- ② 稲田知己、「技術の政治性／倫理性／複数性——事例研究による技術哲学の基礎づけ——」、津山工業高等専門学校紀要、第51号、pp. 17-27、2009、査読有

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

- ① 稲田知己 (ほか7名)、『インター・カル

チャー』、晃洋書房、2009、総ページ数
196 頁のうち、稲田担当部分は pp. 27-52、
「グローバル／ローカルな場としての技
術哲学——カッシーラー・三木・ハイデ
ッガー——」と題された第 1 章が担当部
分

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲田 知己 (INADA TOMOMI)
独立行政法人国立高等専門学校機構・
津山工業高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号：70221788

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：